

農業共済新聞 千葉版

掲載号	6 月 4 週号	
筆者	所属	農林総合研究センター
	職名及び氏名	主席研究員 西川 康之
題名	猛暑に負けないコメ作り！ 上手な栽培管理でおいしい一等米を生産しましょう	
備考	【表説明】 表1 品種別、土壌条件別の標準的な植付け株数及び窒素施肥量 図1 出穂期以降の葉色の低下と㎡当たり籾数が白未熟粒割合に及ぼす影響	

【本文】

昨年は記録的な猛暑により、全国で乳白粒、背白粒などの白未熟粒が多発しましたが、千葉県では一等米比率 91.2%を堅持しました。この要因として、千葉県には地下水位が高く肥沃な湿田が多いため、イネは灌漑終了後の高温や乾燥のストレスを受けにくく、出穂期以降も窒素栄養不足を生じにくかったこと、さらに、高温でも登熟が優れる品種の作付けが奨励されていることが考えられます。しかし、9年前の平成14年には千葉県でも「コシヒカリ」の一等米比率が58%に低下しました。そこで、玄米品質低下の要因を解析して、白未熟粒が発生しにくいイネの特徴及び栽培上の注意点をまとめました。

①穂数と一穂籾数のバランスがよく、適正な籾数が確保されている

「コシヒカリ」は穂数が少ないと一穂籾数が多くなり、白未熟粒が発生しやすくなります。また、多肥栽培では倒伏します。極端な疎植は避けて（表1）、適正な施肥量で穂数を確保することが重要です。一方、倒伏に強い「ふさこがね」は多肥栽培すると籾数が過剰となり白未熟粒が発生するので、土壌条件に適した施肥量（表1）を守ります。

②穂肥の効果により出穂期以降の葉色が維持されている

基肥だけ施用し、穂肥を控えた栽培をすると、出穂期以降の葉色が急激に低下して栄養失調なイネとなり、光合成によるでんぷん生産が低下して白未熟粒が発生します（図1）。玄米品質向上には穂肥の適期施用が重要です。穂肥を省く場合は基肥一発型の専用肥料を用います。適正な窒素施肥量で栽培した「コシヒカリ」の玄米粗タンパク含有率は食味に影響しない7.5%以下で、玄米品質と食味を両立させた栽培が可能です。

表1 品種別、土壌条件別の標準的な植付け株数及び窒素施肥量

品種	土壌	植付け株数 (株/坪)	窒素施肥量 (kg/10a)	
			基肥	穂肥
ふさおとめ	砂質土	60	4~5	3
	壤質土		3~4	3
	粘質土		1~3	1~3
ふさこがね	砂質土	60	5~6	3
	壤質土		4~5	3
	粘質土		3~4	3
コシヒカリ	砂質土	55~60	3~4	3~4
	壤質土		2~3	3
	粘質土		1~2	2~3

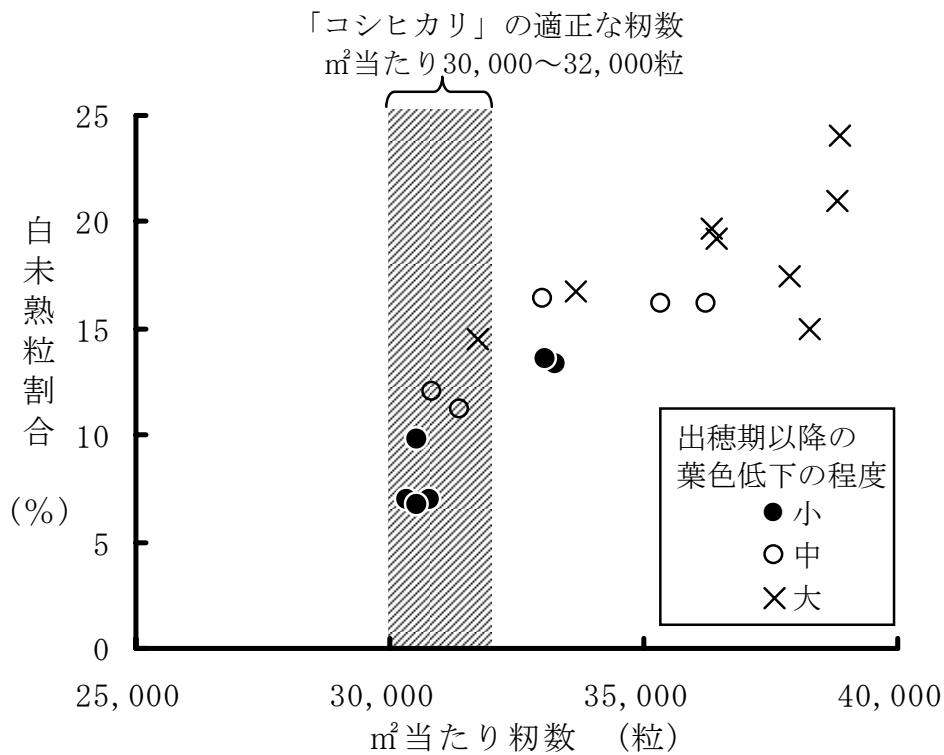


図1 出穂期以降の葉色の低下とm²当たり粒数が白未熟粒割合に及ぼす影響
(平成14年、コシヒカリ)